

上野原縄文の森の観光への活用

—フィールドワークのワークシートから考える—

大西 智和*

1. はじめに

筆者は現在、鹿児島県の史跡や遺跡の観光資源としての活用法について研究を進めており、鹿児島県内の遺跡や西日本各地の「風土記の丘」を訪れ、そこでの観光への活用の実践事例について調査を実施してきた。また、ゼミ活動の一環として、史跡や遺跡を訪れ、それらの観光への活用を考えるフィールドワークも実施している。2020年度は、鹿児島県で遺跡としての知名度がもっとも高く、訪れる人も多い、さらに、活用に関連する施設や設備も充実していると考えられる、霧島市上野原縄文の森を訪れ、遺跡や文化財の観光への活用について学んだり調べたりした。参加した学生には、ワークシートを記入してもらったが、本稿では、その報告を行うとともに若干の展望を述べたい。

2. 上野原遺跡の概要¹

上野原縄文の森のベースとなっている、上野原遺跡の概要について述べたい。上野原遺跡は鹿児島県霧島市東部の標高約260mの台地上に位置し、縄文時代早期から近代にいたるまでの遺構や遺物が確認されている。工業団地の造成に伴い1986年から1997年にかけて発掘調査が実施された。調査の結果、第2・3地点からは、今から約9,500年前、縄文時代早期前半の竪穴住居跡が52軒、調理に関する施設である連穴土坑16基・集石100基、土坑約270基、道路跡2条が確認された。定住化初期の大規模な集落で日本列島の縄文時代の開始期を知る重要な遺跡として、1999年に国の史跡に指定された。

また、第10地点では、今から約7,500年前、縄文時代早期後半の集石252基、土器埋納遺構11基（うち1基には壺形土器2個が埋められていた）、石斧埋納遺構6基が確認された。遺物の出土状況から祭祀に使用された場所であった可能性が指摘されている。約15万点もの大量の遺物が出土し、出土土器の中心となる「平椀式」と呼ばれる土器群には多様な深鉢型土器と壺形土器が含まれる。なお、壺形土器がこのような早い時期に多く出土する事例は他には見られない。土製品には九州最古の土偶、耳飾りやパレット形を呈するものがある。石器は磨製石斧、打製石斧、石鏃、石皿、磨石、異形石器など多くの種類が見られる。縄文時代の早期という早い段階の南九州の特徴を示す重要な資料と言え、これらのうち767点は1998年に重要文化財に指定された。

キーワード：観光、文化財、遺跡・遺物、上野原縄文の森

* 本学国際文化学部教授

1 新東2006, 八木澤2005, 黒川2005を参照した。

3. 縄文の森の概要²

上野原縄文の森は上野原遺跡の保存・活用を目的とする施設で、平成14（2002）年10月に開園した。面積は、約36ヘクタールあり、「見学エリア」と「体験エリア」の2つに分かれている（図1）。

見学エリアは9,500年前の環境を再現したクヌギ、コナラ、クリなどの落葉広葉樹の森で、その中に「縄文の森展示館」、「遺跡保存館」、「復元集落」、「地層観察館」などの施設がある。

体験エリアにはアラカシやヤマモモなどの照葉樹からなる約7,500年前の森が再現されており、その中に、「体験学習館」、「祭りの広場」、「古代家屋群」、「アスレチック」、「展望の丘」などの施設がある。

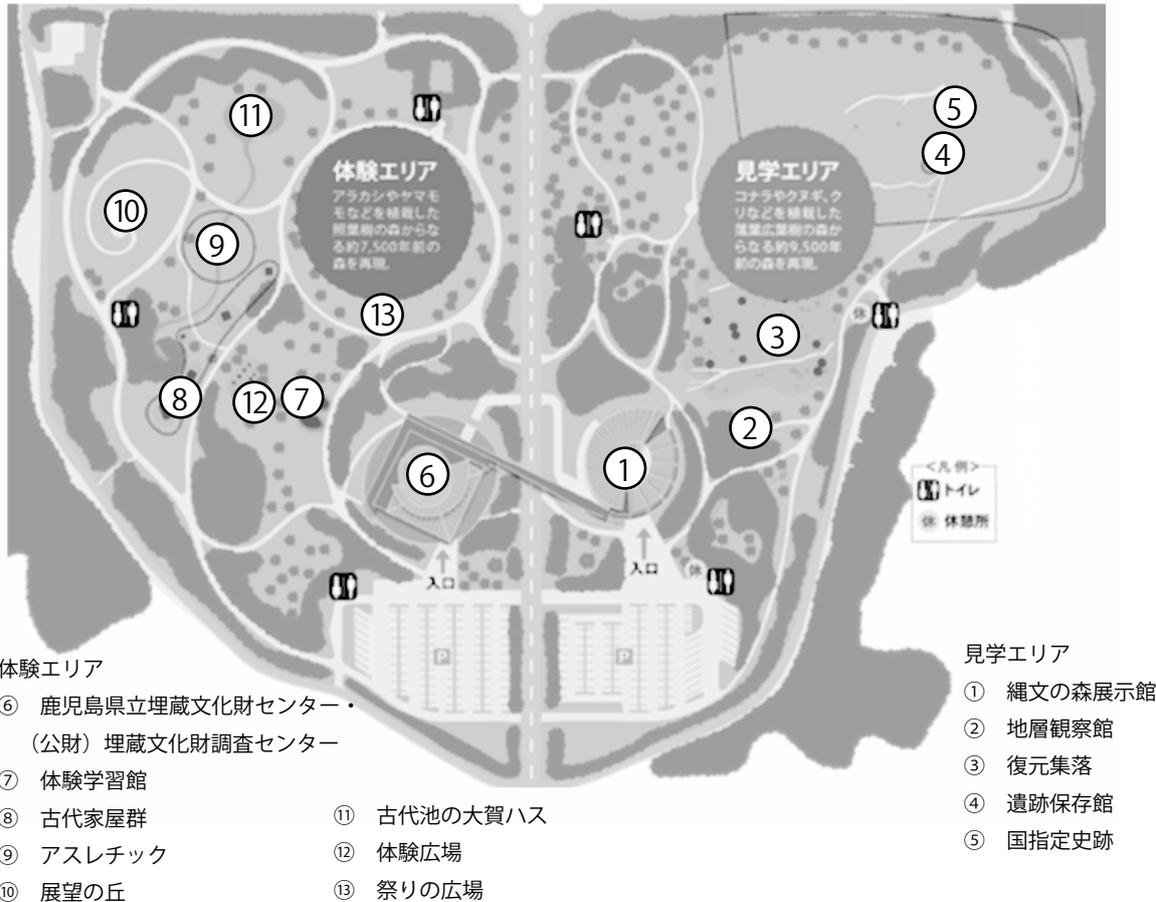


図1 園内マップ

(上野原縄文の森ウェブページ：<https://www.jomon-no-mori.jp/old/donguri.htm> より作成)

3.1 見学エリア

縄文の森展示館（図1-①）

上野原遺跡の重要文化財を中心に、鹿児島県内各地から出土・発見された土器や石器等の資料が展示されている。企画展示室では1年に3回程度、特別企画展が行われており、訪れた日は第58回企画展、「新発見！ かごしまの遺跡2020～発掘調査速報展～」が開催中であった。また、上野原の縄文の世界をイメージした「縄文シアター」やジオラマ、映像資料など楽しみながら学ぶことができるスペースも設置されている。受付付近では、ここでしか入手できないミュージアムグッズの販売も行われている（図2）。2階に

2 鹿児島県上野原縄文の森のウェブページ：<https://www.jomon-no-mori.jp/jomon-no-mori/>（2021年7月25日閲覧）を参照した。



図2 販売されているミュージアムグッズ

(上野原縄文の森ウェブページ：<https://www.jomon-no-mori.jp/jomon-no-mori/museumgoods/> より)

は休憩所や自動販売機コーナー，3階には上野原縄文の森全体を見渡すことのできる展望所がある。有料スペースへの入館料は，通常，個人の場合で，小・中学生150円，高・大学生210円，大人310円である。

遺跡保存館 (図1-④)

国指定史跡の上に建てられた半地下ドーム形の建物で，遺構の一部が薬品処理した状態で保存されている (図3)。ドーム内では9,500年前の竪穴住居跡や集石・土坑などを，発掘時の状態で見学できる。

復元集落 (図1-③)

上野原遺跡第4工区の調査結果をもとに，竪穴住居をはじめ集石遺構や連穴土抗，道筋など，約9,500年前のムラを復元したエリアである。

竪穴住居は複数軒復元されていて (図4)，中に入って見学することもできる。当時の生活の様子を示すため，人形が置かれているものもある。

集石遺構は直径10～20cmの大きさの多数の石で構成される。石を焼いてその上に葉などで包んだ魚や肉などを置き，上から土をかぶせて「蒸し焼き料理」をするのに用いられていたと考えられている施設である。

連穴土坑は大きい穴と小さい穴を掘りそれらをトンネルでつないだ形状を呈する。大きい穴で火を焚き，小さな穴から煙を出して燻製を作っていた調理施設と考えられている。

地層観察館 (図1-②)

上野原の地層断面を観察するための地下式の建物で，上野原遺跡の時代を示す根拠となった火山灰層



図3 遺跡保存館内部の様子



図4 復元竪穴住居



図5 縄文体験メニュー

(上野原縄文の森ウェブページ：<https://www.jomon-no-mori.jp/old/hayamih.htm> より)

などの堆積の様子を直接見るができる。

3.2 体験エリア

体験学習館 (図1-⑦)

土器作りや勾玉作り，火おこしなど様々な体験活動 (図5) をとおして，縄文時代をはじめとした昔の人々の暮らしを学習できる施設である。スタッフによる指導や援助も適切に受けられる。

祭りの広場 (図1-⑬)

各種イベントや体験活動，行楽での利用ができる約1.5ヘクタールの芝生広場である。

古代家屋群 (図1-⑧)

上野原遺跡のほかに志布志市長田遺跡，龍郷町ウフタ遺跡など，縄文時代～古墳時代の竪穴住居が5軒復元されている。

アスレチック (図1-⑨)

シーソー，土器ネット，丸太渡り，ターザンロープ，縄渡り，イノシシの落とし穴，丸太クライミング，

縄うんてい、計8種類のアスレチックが設置されている。

展望の丘 (図1-⑩)

縄文の森の南西部に位置する。錦江湾や桜島、霧島連山や高隅山系などの展望を楽しむことができる。

4. 縄文の森でのフィールドワーク

フィールドワークは、平成2020年11月7日に実施し、2・3年のゼミ生11名が参加した。

最初に、上野原縄文の森事業課長の関明恵氏より、上野原遺跡の概要及び上野原縄文の森の観光への活動事例について講話をいただいた。その後、各自が、展示館、見学エリアや体験エリアなどの見学を行った。さらに、体験学習館で、1時間ほどの時間をかけて、アクセサリ作りを体験した。

フィールドワーク参加者には上野原遺跡や上野原縄文の森について、事前の調べを行ってもらった。また、フィールドワーク実施時にワークシートへの記載を行ってもらった。なお、ワークシートの項目は以下のとおりである。

フィールドワーク（上野原縄文の森）記録シート

1. 上野原遺跡について（特に注目したことや新たにわかったこと）
2. 上野原縄文の森における、遺跡や文化財（出土資料など）の観光への活用の実践事例
3. それぞれの項目について、思ったことや考えたこと
 - ・展示館の展示
 - ・展示館のその他の施設（縄文シアター、ショップ、2階や3階）
 - ・体験学習（館）について
 - ・屋外（遺跡エリア）³
 - ・上野原縄文の森（上記の項目以外のエリア）
4. 皆さんが考える、上野原縄文の森における遺跡や文化財の観光への活用可能性について

5. ワークシートの結果と展望

以下にワークシートへの回答例を紹介する。ワークシートの記述は、内容が重複しているものも基本的には個々に取り上げた。明らかに誤解と思われるものなどは除外し、必要に応じてよりふさわしい項目に移動させたものもある。なお、学生がフィールドワークにおいて見聞したことの記述であるため、すでに、上野原縄文の森として取り組まれている事柄や、事実誤認等が含まれているであろうことを、お断りさせていただきたい。

5.1 上野原遺跡について（特に注目したことや新たにわかったこと）

- ・常設展示の、人形が動くディスプレイは興味深く、効果的に感じる。
- ・九州最古の土偶が印象的だった。
- ・見たことのない土器（角筒形）が印象的。
- ・約9500年も前の竪穴住居跡が52軒も見つかったこと。
- ・体験学習館や復元集落は低年層に魅力があると思う。

3 実施したワークシートでは「屋外（遺跡エリア）」と「上野原縄文の森（上記項目以外のエリア）」に項目を分けていたが、回答を見ると分けられない方がよいと認識できたため、報告にあたっては「上記項目以外のエリア」にまとめた。

- ・上野原遺跡出土遺物以外の資料も企画展や常設展で展示されている。
- ・企画展では鹿児島県全域の新しい調査成果を学ぶことができた。
- ・広くて遊具などもあるため、子どもが遠足で訪れたら楽しそう。
- ・アクセスが悪い。

回答には上野原遺跡に加え、上野原縄文の森に関するものも見られた。いずれにしても、本項目はそれぞれの参加者のもっとも印象に残ったこととみなしてよいかもしれない。観光資源としての活用に結びつくものも含まれていると思われる。

5.2 上野原縄文の森における、遺跡や文化財（出土資料など）の観光への活用の実践事例

- ・霧島周遊観光バスとの連携は重要な役割を果たすと思う。
- ・地域ボランティアガイドの育成、縄文の森をガイドするどんぐり倶楽部、縄文の森の職員の中学生向けの出前授業といった地域とのつながりを大切にしたい事業が多く行われている。
- ・観光バスとの連携、地元ボランティアガイドの育成、シニア・子どもの入館料の減免があること。
- ・連穴土坑による調理体験は興味深い。
- ・復元住居を用いたキャンプ。
- ・参加型の体験イベントの開催。
- ・触ることができる資料があること。
- ・上野原遺跡出土資料の展示、遺跡や復元住居の公開。
- ・スタンプラリー。
- ・展示館だけではなく、体験学習館、鹿児島県立埋蔵文化財センターなど一体となった取り組みが行われている。

周遊観光バスとの連携、様々な体験型のイベントなどが実践されていることとして印象に残ったようである。

5.3 それぞれの項目について、思ったことや考えたこと

展示館の展示

- ・展示はとても見やすくまとめられている。当時の食事のサンプル、床下の展示などに工夫が見られ、面白かった。
- ・展示ケースの中のフィギュアはわかりやすく、子どものみならず大人にも楽しいものだった。
- ・企画展示と常設展示が解説によって結び付けられており、常設展示への誘導であるとともに両方の場を通して自主的に学んでほしいという工夫であると思った。
- ・縄文人の暮らしの様子の模型をガラス越しに床上から見る展示が新鮮な感覚だった。
- ・ジオラマに動く縄文人がいて、スケール感がよく伝わってきた。
- ・縄文人の食事の展示がすごくリアルでおいしそうだった。
- ・当時の食事や動物のはく製が展示されているコーナーが楽しかった。
- ・実物だけではなく、映像や触ることのできる資料があり、低年齢層向けにも楽しんでもらえるよう工夫されている。
- ・複製品でも触ることができる資料があると嬉しい。
- ・事実のみを説明した解説から、「それはなぜ？」を自分で考えてもらいたいという意図を感じた。

- ・重要文化財が展示されている。
- ・鹿児島県の埋蔵文化財に関する数多くの資料が展示されている。
- ・上野原遺跡から出土した数多くの土器から、当時の人々の生活が想像できた。
- ・少し暗く感じられた。細かい説明が欲しいと感じた。重要文化財の表示があまり目立っていなかった。

実物の資料はもちろん、床下の展示、精巧なフィギュア、触ることができる資料など展示を構成する様々な工夫にも関心を持っていることがわかる。より魅力的な展示は観光への活用に大いに貢献するものと考えられる。「重要文化財の展示」が挙げられていたが、文化財に指定されているものはそれ自体関心の対象となり得る（大西2020）。県内各地の遺跡の指定文化財も展示することによって、さらに魅力を増すと思われる。

展示館のその他の施設（縄文シアター、ショップ、2階や3階）

- ・子ども用の図書コーナーは良いと思う。子どもが退屈しないように活用できる。
- ・「じょうものもり」という子ども向けのパンフレットは、地図、縄文クイズやタスクが掲載されていて楽しいと思った。
- ・縄文シアターは演出が凝っており、観光客にもアピールできる。
- ・縄文シアターは3つのスクリーンを用いて上映され、迫力があつた。
- ・縄文シアターの仕掛けはとても凝っており、飽きが来ない。縄文シアターのことをもっと知ってもらいたい。
- ・展示館はモダンな雰囲気の外観・内装であり、観光客への受けはよいと思った。
- ・2階の休憩スペースはガラス張りで開放感があつた。
- ・ミュージアムショップで販売されていたものの多くは、思ったよりも安い値段だった。子どもでも容易に購入できる点が良いと思った。
- ・土産物のコーナーが少し寂しく感じられ、もっとグッズがあっても良いと思った。

「縄文シアター」の感想が多く見られた。現在よりさらに「縄文シアター」への様々な誘導を加えることにより、より多くの来館者に視聴してもらえるはずである。

2階の休憩室は確かに開放的な雰囲気居心地が良い。ここでおいしい飲み物や食べ物が楽しめると思うのは筆者だけではないだろう。

ミュージアムショップについての意見も複数見られた。ここでしか入手できないものがいろいろと販売されていることは魅力であるが、ショップが主要な場として位置づけられている桜島ビジターセンターの事例（大西2019）を参照すると、さらに充実させる方向もあり得ると思う。

体験学習（館）について

- ・窓際に人形がいっぱい飾られていて可愛らしかった。
- ・担当者が時間配分まで注意して説明してくれた。作りやすかった。
- ・勾玉作りは軟らかい石材を加工するため、子どもでも簡単に作れると思った。
- ・ネックレスを作りは面白かった。
- ・ハート形のネックレスを作った。自由に作ることが楽しい。
- ・地道な作業で疲れたが、この作業を通して、昔のもの作りのたいへんさがわかった。

- ・弓矢を使うコーナーはもっと充実するとよいと思う。
- ・多くの体験メニューがあり、良いと思った。勾玉作りを体験したが、年代を問わず楽しめると思った。
- ・場所が少しわかりにくかった。もっと案内が欲しい。

フィールドワークの参加者全員にアクセサリ作りを体験してもらったが、楽しかったり、体験を通じて昔のことを考えてくれたり、おおむね良い経験であることがわかった。様々な体験ができる博物館等は近年増加しているが、縄文の森が提供している体験メニューは豊富であり、人を引き寄せる魅力があると思われる。一定程度の時間がないと体験メニューを楽しむことはできないため、長時間滞在してもらう、あるいは体験を予定して来園してもらう仕掛けや工夫により利用が増えると思う。また、製作した作品のコンテストのような、作る楽しみに、さらに別の楽しみを付加するような取り組みもあり得るのではないかと考えている。

上記項目以外のエリア

- ・遺跡保存館と地層観察館が印象的だった。遺跡保存館は考古学のロマンが詰まった状態で残されていて、文化財への興味がわく展示だと思った。
- ・住居跡がリアルで、縄文時代にいるような錯覚に陥った。
- ・復元竪穴住居を見ると縄文時代のことが想像できた。
- ・連穴土坑に関心を持った。
- ・広大な敷地であり、遊具（アスレチック）を使ってはしゃぎたい気持ちになる。
- ・体験広場はとても広くアスレチックも設置されているため、公園としても利用できると思った。
- ・スタンプラリーや屋外のアスレチックは、子どもが楽しんで施設を回れる要素だと思った。
- ・アスレチックゾーンには楽しい遊具（アスレチック）がそろっているので、付近に住んでいたら、遊びに行きたいと思う。
- ・埋蔵文化財センターとの配置が面白い。
- ・敷地が広いので、ウォーキングをする人にとって利用価値が高いと思った。
- ・丘の上という地形なので、その貸し出しがあったら楽しいと思う。
- ・テーマパーク的な、リアルな縄文時代を感じられる雰囲気のある場所や実体験ができる場所があるとよい。
- ・カビの匂いや、汚れている部分があり、保存遺跡の展示の難しさを感じた。
- ・もっと多くの案内板が欲しい。

住居や連穴土坑といった遺構への関心は高い。竪穴住居の復元された遺跡は少なくはないので差異化を図ることは必要となろう。これまでに取り組まれている竪穴住居に宿泊できるイベントの実施といった、復元遺構を用いた他の遺跡では経験できないような希少価値の高い体験メニューがさらに加わると観光資源とし活用の度合いが増すのではないかと思う。

広大な敷地とくに「祭りの広場」を活かしたイベントの実施も有効と思われる。

アスレチックにも関心が高いことがわかる。しかし、これに上野原遺跡の遺物や遺構にちなんだ、たとえば連穴土坑や竪穴住居をかたどった遊具が加わって遊園地としての魅力が増せば、さらに利用が増すのではなかろうか。佐賀県吉野ヶ里歴史公園の事例（図6）が参考になるとと思われる。吉野ヶ里歴史公園への入園は有料であるが、中学生以下は無料であるため、気軽に利用できるし、小さな子どもには保護者



複合遊具



ふわふわドーム



トランポリン



滑り台

図6 吉野ヶ里歴史公園「遊びの原」の遊具

(吉野ヶ里歴史公園ウェブページ：<https://www.yoshinogari.jp/information/zone/ancient-field/> より作成)

が同伴するため、入園者増にもつながっていると思われる。

5.4 皆さんが考える、上野原縄文の森における遺跡や文化財の観光への活用可能性について

- ・ 竪穴住居に入れることはなかなか貴重な体験なので、これを強調する。
- ・ 事業内容は充実している。春祭りや秋祭り、スポーツイベントなどの取り組みがなされ、地域とのつながりも非常に強い。
- ・ 霧島楽々周遊観光バスとの連携をさらに進めて、観光客をさらに誘致する。
- ・ 展示室の内装に当時の土器の文様が用いられていた。そこからヒントを得たことで、太古のデザインをモダンにアレンジするような体験をしてもらおうと面白いと思った。
- ・ 縄文シアターの物語を実際に体験できると面白い（プレゼントとして描かれている角筒形土器を製作し、誰かに贈ろうというようなコンセプトで）。
- ・ お祭りや竪穴住居でのキャンプが行われるなど、今のままでも十分活用されている。
- ・ 発掘体験。
- ・ 縄文の食事を本格的に作るイベント。
- ・ 竪穴住居に入れることはなかなか貴重な体験なので、これを強調する。
- ・ 壺形土器はめずらしいので、たくさんの人に見てもらいたい。
- ・ 「縄文」を全面に押し出したイベントの実施。
- ・ 展示館で展示している資料が出土した遺跡へのアクセス方法が示されていれば、上野原縄文の森を拠点として、県内の遺跡を訪れることができ、観光につながると思った。

種々の体験、それもかなり本格的な体験を取り入れたイベントが、有効であるという意見が多く見られた。縄文の森ならではの、という体験イベントは魅力があると思う。縄文の食事作り、上野原遺跡で出土した形（壺形や角筒形）の土器作り、発掘調査体験、復元住居でのキャンプなどの様々な体験をパックにし

て縄文文化を深く学び体験するイベントがあると面白い。

また、鹿児島県の埋蔵文化財行政の中心である、鹿児島県立埋蔵文化財センター・(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターも同じ場所にあることは重要である。上野原縄文の森は遺跡や遺物に関する、ものや情報の集積地とも言える。ここに来れば、鹿児島県の遺跡や遺物のことがわかり、県内各地の遺跡を実際に訪れたいくなるような、国立公園におけるガイド施設的な役割も果たし得ると考えている。

5.5 上野原縄文の森を観光に活用する際の問題点、不利な点

- ・アクセスが悪いこと。縄文の森内の施設間の距離が長いこと。見学エリアの隅々まで足を運んでくれるかどうかは疑問。
- ・立地が悪い。気軽には行けない場所。
- ・アクセスが悪い。竪穴住居などが復元されているがインパクトがない。
- ・遠方から来る人のアクセスが悪いと感じた。
- ・一般の人への認知度が低いのではないかと思う。
- ・周遊バスなどもっと増やす。

アクセスが悪いという意見が多かった。遺跡の立地に左右されるため、仕方がないことではある。現在行われているような、周遊観光バスとの連携が、自動車を利用しない人にとってのアクセス改善の有効策だと思われる。遺跡巡りのバスツアー、文化財のみに特化したバスツアーといった、テーマを絞ったバスツアーの企画が増えるようなことがあれば、さらにアクセスの改善につながるであろう。

ちょうど、2021年7月に北海道・北東北の縄文遺跡群が世界遺産に登録されたばかりである。「南の縄文」についても、様々な形で広報を行い、知名度の向上を目指すべきではなからうか。

6. おわりに

学生のワークシートの回答に基づき、縄文の森の観光への活用のあり方や方向性について述べてきた。学生の記述、筆者の展望ともに、縄文の森で取り込まれていることの実態や意図を把握しきれていない部分も随所にあったのではないかと心配している。しかし、学生ならではの視点や感覚から寄せられた回答には有用性が高いものも多いと考えている。

今回のフィールドワークで得られた結果は、現在日置市と鹿児島国際大学との包括連携事業の一環として取り組みを進めている、日置市（特に吹上地域）の史跡・遺跡の観光への活用に活かすつもりである。

謝辞

本研究は令和2年度鹿児島国際大学附置地域総合研究所共同研究プロジェクトの助成を受けて実施したものである。フィールドワークでお世話になった、上野原縄文の森事業課長の関明恵氏、スタッフの皆様、フィールドワークに同行し、学生に様々な指導をいただいた鹿児島国際大学ミュージアム学芸員の鐘ヶ江賢二氏に感謝申し上げます。また、フィールドワークに参加しワークシートを提出してくれた、学生の皆さんに御礼申し上げます。

文献

- 大西智和 (2019), 「文化・自然遺産や文化財の活用による地域活性化の可能性」, 『地域総合研究』 第46巻第1号, 67-76頁。
- 大西智和 (2020), 「日置市吹上歴史民俗資料館の活性化を目指した企画展示の評価と展望」, 『地域総合研究』 第48巻第1号, 85-95頁。
- 黒川忠広 (2005), 「上野原遺跡第10地点」『先史古代の鹿児島 資料編』 鹿児島県教育委員会, 382-385頁。
- 新東晃一 (2006), 『南九州に栄えた縄文文化・上野原遺跡』, 新泉社。
- 八木澤一郎 (2005), 「国指定 上野原遺跡・4工区」『先史古代の鹿児島 資料編』 鹿児島県教育委員会, 386-389頁。